

1 徳育教科化の議論

安倍内閣において設置された教育再生会議は、平成十九年六月に出された第二次報告で徳育の教科化を提言しました。そうした提言の背景には、子どもたちの規範意識が低下しているという認識があつたようです。規範意識を育てるには、しっかりと道徳教育をやるべきであり、そのためには、道徳の時間を教科とするのが望ましいという判断であつたと言えます。しかし、その後の中央教育審議会の議論では、教科化を見送るということになりました。見送るというのは、今後も審議を続けるということのようで、もう教科化はしないという決定をしたわけではありません。その後、平成二十年三月に小中学校の新しい学習指導要領が告示されましたが、そこでは、道徳教育の充実は図られているものの、道徳に教科としての位置づけは与えられていません。

この一連の成り行きの中で、考えるべき問題は多々あります。

たとえば、ほんとうに規範意識は低下しているのでしょうか。青少年による凶悪犯罪の増加などを指摘する方もいます。マスコミの取り上げ方がセンセーショナルになっているだけだとも考えられます。戦後すぐの時期にも、戦前にも、青少年の凶悪犯罪がなかったわけではありません。古い新聞記事を探れば、いくつもの凶悪犯罪

リレー連載

教育のゆくえ

道徳教育・心の教育の ゆくえ

林 泰成

上越教育大学教授
(上越教育大学附属小学校長)



が出てきます。

また、教科化するというのはどういう事態を意味しているのでしょうか。文部科学省は、教科化についての定義を明示してはいませんが、一般には、教科書があるということ、評価を行うということ、中学校以上では専門の教員免許があるということ、が要件であると考えられています。しかし、教育再生会議の提言では、点数での評価をせず、専門の免許も設けないということになっていました。つまり、教科書を作るというだけの教科化が唱えられていたのです。

2 教科書を作るということ

日本の道徳教育は、道徳的価値を教え込むという、いわゆるインカルケーション（教え込み）の立場に立っています。したがって、教科書を作るということは、その道徳的価値を教えるための資料を作ることになります。私は、インカルケーションが間違いだとは思いません。子どもたちは、先天的に道徳的価値を持って生まれてくるというわけではないので、どこかでそれを学ぶ必要があります。自己の良心に照らして自律的な判断をすることはとても大切なことです。その判断の規準となる道徳原理は、生まれながらに備わっているわけではないのです。したがって、それを学ぶためのよい資料が必要です。

しかし、教え込むべき道徳的価値については、確定する

ことが難しいと言わざるをえません。たとえば、愛国心はとても大切だと考えるひともしあれば、自由や平等というような価値と較べてそう大切なものではないと考えるひともあります。このように、ひとによってとらえ方の違う道徳的価値があるということを考えると、全国共通の教科書を作るということは難しい問題を孕んでいるのではないかと思います。

ちなみに、私自身は、愛国心はとても重要な道徳的価値のひとつだと考えています。それは、生まれ育った郷土を愛するということが同様のことだと思っています。しかし、

「日本は素晴らしいけれども、〇〇国は最低だ」というように愛国心が教えられるとしたら、それは誤ったことでしょう。私たちが日本の国を愛するのと同様に、外国の方々には自分の祖国を愛する権利があります。最近、日本の学校にも外国籍の子どもや、保護者が外国籍という子どもが増えています。学習指導要領の「道徳」の「内容」の中には、「日本人としての自覚をもつ」という表現があります。日本の教育について記してあるのだからやむをえないとの判断もあるでしょうが、外国籍の子どもが増えている現状を考慮すれば、修正すべき表現だと思っています。

3 自尊感情の育成

さて、規範意識が低下しているということが事実であり、多くの人びとの同意できる道徳的価値が明らかになったと

して、道徳を教科にすれば、規範意識は育つのでしょうか。私は難しいと考えます。その前に、道徳的価値を受け入れる心の準備が必要だと思うからです。それは、ひとことで表現できるようなものではないと思いますが、たとえば、自尊心感情であつたり、自己有用感であつたり、メンタルヘルスであつたりします。心にゆとりのないときに、友情が大切だと教えられて、「なるほどそうだ」という気持ちになるでしょうか。「正直であることが大切だ」と教えられて、自分も正直になろうと思えるでしょうか。そのように考えると、道徳教育は、道徳的価値を教えるだけでは足りないということになります。

じつはこうした点は、多くの方々が気付いていることです。学習指導要領に記された「道徳」の「内容」には、自尊心感情という言葉はありませんが、小学校版及び中学校版の学習指導要領解説道徳編には、「自分への信頼感や自信などの自尊心感情や他者への思いやりなどの道徳性を養う」という具合に、自尊心感情を育むことが述べられています。

日本の若者は、この自尊心感情が著しく低いという指摘があります。たとえば、古荘純一著『日本の子どもの自尊心感情はなぜ低いのか』（光文社新書）というような書物も出ています。自尊心感情が低いということは、謙遜を美德と考える日本文化の特色と言えるかもしれませんが、しかし、それが子どもの主体的な行動を押しさえ込んでいるとしたなら、改善すべきことです。

では、どうすれば自尊心感情を育むことができるのでしょうか。

うか。それは、単純な言い方をすれば、子どもを誉めることです。「すごいな」「やったね」というような声掛けをすることです。ですが、誉めることは、ときには、マイナスの影響を与えることもあります。というのも、誉めるということは、たいいていの場合、成果を誉めることになるからです。「百点とつたね。すごいね」と誉めたとき、そこには「百点とれなかったらお前はダメだ」という暗黙のメッセージが含まれることがあります。百点を採れているうちはいいのですが、採れなくなつたとたんに、学校に行けなくなるといった事態が生じることもあります。

そこで、誉めるのではなく、勇気づけることが大切だと言われるのです。勇気づけるというのは、存在そのものを認めるということです。「百点採ろうが、零点採ろうが、お前は私の大切な子どもだよ」というようなメッセージを送るということです。存在そのものを認めるということなのです。自己の存在が認められたとき、ひとはそこに自らの居場所を見いだすのではないのでしょうか。

道徳教育に代えて「心の教育」という言葉が使われることがあります。それは、こうした自尊心感情の育成などを強く意識した表現であるように私は考えます。

4 体験

また、道徳的価値を学んだ後にも求められるものがあります。それは、学んだ価値を実践する場です。もちろん、

実生活の中で実践できればそれが一番望ましいと言えますが、しかし、少子化で子どもの数が減っていることや、一人でも遊べるゲームがたくさんあるということを考えると、学校で意図的に仕組むということも必要になってきます。そうした仕掛けは、模擬的体験のこともあるでしょうし、実体験のことでもあるでしょう。いずれにしても、子どもたちは、そうした中で人間同士のかかわり合いの中に投げ出され、道徳の時間に学んだことが本当に生かせるかどうかを試されるのです。

人間関係の中で子どもたちはさまざまなトラブルも体験します。そうしたトラブルは、人間関係を学ぶとてもよい機会です。そのトラブルに押しつぶされるというのでは困りますが、大人の力を借りずに解決できるようなトラブルを体験させることはとても重要なことです。そのためには、どういったことを仕組めばよいのでしょうか。

総合的な学習の時間や特別活動などで行われているさまざまな体験活動が、そうした機会を提供してくれると言えますが、自分の素を出さざるをえないような非日常的な場面を作り出すということがひとつのポイントだと言えます。たとえば、長期宿泊体験は、他者との長期間にわたる生活を強要することになります。一泊や二泊の宿泊では、よそ行きの顔で生活できても、それが、四泊五泊と続くと、もはやよそ行きの顔では生活できなくなってきます。ありのままの自分をぶつけざるをえなくなってくるのです。沖縄県の小学校の先生からお聞きした話ですが、宿泊を伴う

活動の際、子どもたちは、下着のままで大浴場に入ろうとするそうです。沖縄には温泉がないため、小さい頃からみんなでお風呂に入ったという経験がなく、恥ずかしいという気持ちになるようです。しかし、もちろんそれはマナー違反です。もし一泊だけの宿泊ならお風呂に入らずに済ませることもできるでしょう。しかし、長期になるとそうはいきません。

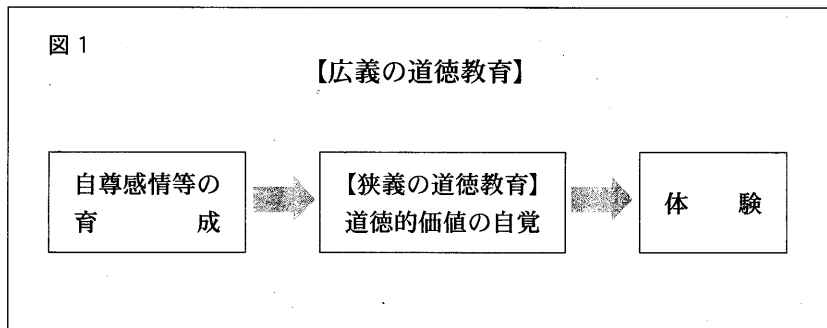
そうした体験活動ではもちろんストレスも溜まるでしょうから、トラブルも増えてくるのが予想できます。強力なストレスは避けるべきですが、ストレスは成長の糧ともなります。十分な配慮のもとで、子どもたちには成長のために、ぜひストレスを感じさせてやっていただきたいと思っています。

5 広義の道徳教育と狭義の道徳教育

繰り返しますが、私は、道徳的価値を教えることは必要だと思っています。しかし、それだけが道徳教育だと考える立場には反対です。その前後にまだやるべきことがあるのではないかというのがここの私の主張です。図示すれば図1のようになります。道徳教育というものは、自尊感情等の育成や、道徳的価値について学んだ後の体験活動なども含めて「広義の道徳教育」として考えていかなければならないのではないかと思います。教育再生会議で提案されたように、道徳の時間を教科とすることだけを行

うと、図の「狭義の道德教育」だけを道德教育とみなすことになっていくのではないかと思います。

平成二〇年三月告示の新しい学習指導要領では、教科や他領域でも道德教育に言及されていますから、広義の道德教育がより強く意識されているとらえることもできます。しかし学習指導要領の「道德」の「内容」の箇所には、「道德の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う道德教育の内容は、次のとおりとする」と記されており、教科や他領域でも、道德的価値を取り上げることが述べられているとも解されますので、狭義の道德教育が、適用範囲を広げて強化されているようにも思われます。後者だとすれば、教科の中でそれぞれの道德的価値を具体的にどう教えることができるのか、今後探っていくかなければなりません。



しかし、昨今の教育政策をめぐる議論を顧みると、道德的価値の自覚や伝達だけにはとどまらない動きが生じているように思えてしまうがありません。

たとえば、文部科学省は、小学校におけるキャリア教育の必要性を唱えています。キャリア教育は、従来、中学校や高校で進路指導として行われていましたが、昨今では、勤労観や職業観を培う教育として取り組まれています。こうしたキャリア教育が小学校においても必要だと主張されている点で、職業指導だけを意味しているのではないということは明らかです。それは、職業選択以前のもっと基礎的なもの、すなわち、在り方生き方教育とでも言うべきものになっているのです。今までの道德教育では十分に扱えてなかった部分が、キャリア教育という名称で表舞台に出てきたと言えるのではないのでしょうか。そのように考えると、キャリア教育もまた広義の道德教育であるように思えてきます。

食育についても同様のことが言えるのではないのでしょうか。平成十七年には食育基本法が制定されました。その第一条には、「豊かな人間性をはぐくむ」という表現もあります。食育は、直接的には道德教育ではないものの、道德的価値の伝達だけではなしえない人間性の育成に取り組むものだと解されるのです。

キャリア教育にしても食育にしても、道德教育という言葉が用いられているわけではありません。しかし、どのよ

うに表現されようとも、そうした人間性の育成や人間関係づくりにかかわる、広い意味での道徳教育を充実させようとする動きは、もはや止めようがないと私には感じられるのです。

6 知識基盤社会と道徳教育

こうした道徳教育や心の教育の動きは、現代社会の特色とも関連しています。現代社会は知識基盤社会と言われています。知識基盤社会では、知識を有すること、だけでは、もはや特権的地位を得たり、お金儲けをしたりすることはできません。知識は、あちらこちらにあふれているからです。そうした社会では、知識を応用する力、たとえば、単に知るだけでは使えないような身体知を有しているとか、知っているだけでは意味のない道徳的価値をきちんと身に付けているとか、知識に加えてさらなる能力が求められるようになります。

しかし、そうした社会が望ましい社会なのかどうかということについては議論の余地があります。もし、画一化された価値観が押しつけられることになるのなら、それは、民主主義の考えには反することになるでしょう。私たちは今、経済的には低成長の時代を生きており、限られた資源を使いながら持続可能な社会を考えていかなければならない時代を生きています。止めようがない社会の変化

を前提にしつつも、人間性の本質や人間の在り方を考え、望ましい道徳教育・心の教育のあり方を学校現場から提案していかなければならないと思います。多様な子どもたちの様子を一番理解しているのは、現場に立つ教師だからです。